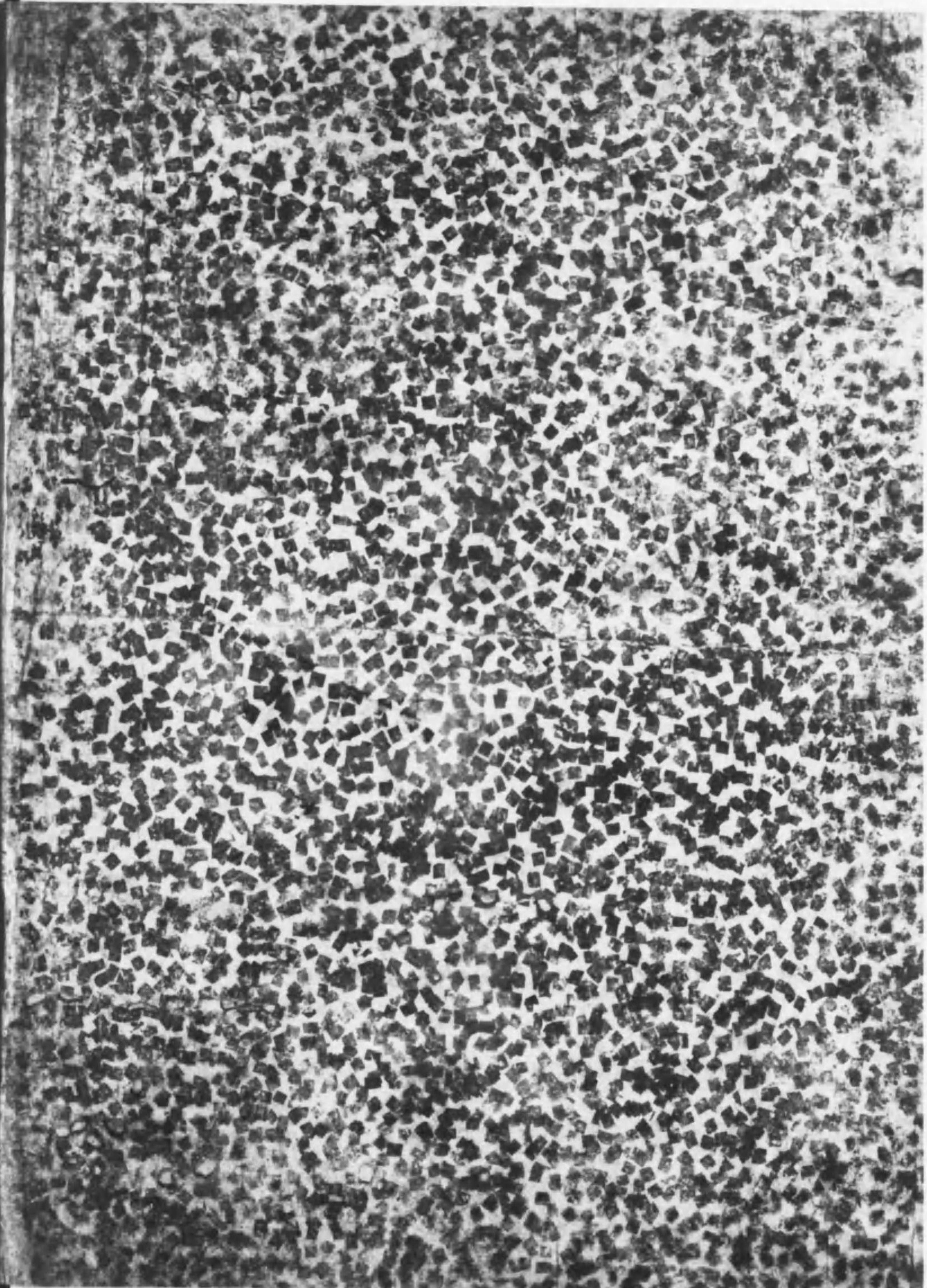




始



為相師
印



水鏡卷之三

敏達天皇

帝天武天皇九代

崇德天皇

孝謙天皇

天智天皇

帝天武天皇九代

持統天皇

帝天武天皇九代

元明天皇

帝天武天皇九代

仁武天皇

帝天武天皇九代

孝謙天皇

用明天皇

帝天武天皇九代

推白天皇

帝天武天皇九代

自稱天皇

帝天武天皇九代

肩乃天皇

帝天武天皇九代

天武天皇

帝天武天皇九代

文武天皇

帝天武天皇九代

元正天皇

帝天武天皇九代

孝謙天皇

一冊二代放達天皇十一年崩年大正葬河内國碳長中尾屋
北朝ノミニ放達天皇ニ申キ歎乃天皇の弟
二所子宣化天皇女石姫皇后之歎乃天皇の子よ十
五年早成正月より東宮小名を下す壬辰の
正月三日より御内侍ニ上すと上を
子孫しまれ奉るまゝ一ノ用の天皇、子孫
に下すと、御内侍ニ申リ御内侍も、之を
聖源太守於此並起事



すましやうかをまといひて、十一月、十二月にすま
しを終り、といひ、すましをとめてゆくと
まかくての、くちびるひろいもくやつて
筋がうなぎてこゝへり、このよしをヨリテ
先して行幸をもとめ、さういふことを、中
かくえりはつやうまわうらしわざで、わや
うわうるいゆーがたうて、まことにれ、すま
し入をとさんとのをましまして、宵月、なま

日高鶴齋筆

すましのきのいとくくいおこしの宵月、
たまごと高麗もがくすのいのとくまで
きてえりをまじへりて、まじへりて、まじへ
ねじててもかくせむしのとく申べり、
うのうのうにをきて、うのうもとて、よみをま
じて、うのうにあらへり、わくわく、うのう
にまくは、二年三月、二月十五日を、夜をま
すまごとし、てましをあもて、南堂佛との事
所、う二年三月、二月十五日をまくは、二年三月、二月十五日をまくは、

聖傳大字向末吉露詩書

今不至也。七年二月大子上
有經論小品三卷。素曰梵天佛釋
不空。之已知。而向。而先。而知。而
以。而。而。而。而。而。而。而。
羅漢。收。大。事。
年。一。月。一。日。釋迦。世。

自創獲國奉漢人之佛事

一
十
月
一
卦
解
加

一
チヨトカ
リ
タマシ
ヒテ
タマ

まよひの山
もて、アキラ
金子とおれ、
うそ

卷之三
七言律詩十一首

と同居
り人を
いふに
てしの

卷之三

卷之三

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

本居宣長著
古事記傳

卷之二

卷之三

濟國奉請石碑勅書
上之勿以爲勤勒也
之于不勞我馬

子の事は嘗て未だ見ゆ
て是れを之に因る

臺大長可上博山由春雨事
一月三十日

乃大驚曰。是吾師也。乃請之。問其所以能。答曰。吾師之教。以忠信爲本。勤學爲基。勤學而忠信。則無往而不成矣。

卷之三

大行

御像也。」

火を引かずやまの火のをも
てはまくにあらずも心に云ふ
まことに、をもくし天ト云ふれ、うきそいのを
うながすの、すなへ
やうやう、とくにひじにうらうと佛家をすこ
はくとくそめやうしたれどり力六月
蘊我の大也てすい、すがゆ三寶をり、
まくさく、さすがゆ、りそらひ、あゆま
まつてこのまえ、さくふくろ、れて又室塔を

道城江口之音アリ

天子乃召用肥
欽以天官為之
大臣稱我高納
其犯坐已乘九月
五日之夕小

丁巳年二月
聖德太子
之子

太子の御子のいとまをうに下れでひよこて
おまきしてすくはまよと太子大誓願をおあらびて
おまきうそに天王寺をみとておじくそくのと
小をせきてよてひまされにとんのや、天あられ
らぬみとんぢかのとよをくじりて、おせぬ
おーふうのやうやじゆすむりておまくらわく、
のふうしなり川勝手とくじをまへ先ね
あらうつりとくみをはくとくづくすれど
おもじててもとくまされちりむとまきの
人をアモリとみてみあらわゆくあらてくりし

造営天皇

天王寺並行もあり先られしも

一世四代崇峻天皇五年崩年三葬太和倉橋山舉覆

内之のみと崇峻天皇と申す欽明天皇のオナガハホ
竹母箱具大女小姫若狂と申す。二月一日ノリサ
ツヨ治内。六十七年。五年。五

李奉朝事

に付給てゆく。聖德太子をもいきだましの
をうへてひしらしと人をもすわせたまへだましの
を付いのうれりやゆもすとせたりますかほ

まれりいとよのたたかひにゆくもんの
まほほくうむれりがひこまよふと喜び
みつぶらしきをとすとて東洋駒アシヤクノハ
リテ十一月の三日みこひしをしまシツ
そのうちれんじゆまきまつりの下され合
えをしとふんとこのたのーわきに、なす
じくしのばへだち大臣駒を演してさまくのま
かさませてやつとのうちに女房メイブウアリハモ
あれくてソロマセテとアホリ大大臣
しお先シオセンのひで、ひでてお大だのみくわよみて
まほほくうめがみゆきてあゝがみくわいこれ
まほほくうがうわばばとておもむしきままで
まほほくうとしてやきなれらし、駒アシをひてわれアハ
シキト大だとけーねくまみて、以シをもとまでぬ
りすみとーふ大きこのうそ、いもくいもくもとくも
をとくはまくへかまつてお大だの心あすあくも
あひたるもとくも

一五五代推古天皇

癸卯崩年七十三
墓碑長山覆

ほまくみと推古天皇ミサハニミ欽明天皇の御ミタマしお先
御母稱目大長女蘿我小姉アラカミタチとまみのア
十一月日

内小口はまよ付シテサハ、外ノアリキミサニ世六事

くさぬり川手にて、りくうの宮にみとれ、女入
聖靈奉行天下事

ナカニシヨリの御事御事の御事御事の御事

聖靈奉行天下事

キミを子供をもつて、母子の事、母子の事

一からうの事、母子の事、母子の事

被移天寺難波事

ナサニ小ちりも居トシテ、天王寺難波

小うち一姫一姫一姫一姫一姫一姫一姫一姫

難波未か舊

ナミテ、壬午年、三月既

清までおされアリ、五右の小方見えたのうこ
小またたけ、小ひもひもひもひもひもひもひも

トトテ、廿日をへて、宵、もくもくと、まのま、この

け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、

け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、

け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、

け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、

け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、

け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、

石子みどりと流水音、中あてももみすき梅禮音

シ、小南天竺のあれんのうこのま、いたしまの木

のじやもくもくと、じりと、うわねれ、うわねれ

のじやもくもくと、じりと、うわねれ、うわねれ

いきなりのまゝ人をひこうへりよしとひよけ
木下たゞはるかにあもてたわれまくらでふ
ひきてやひきして、それからうそりとてえ
鶴谷香のまゝ、丁度のまゝ、薰爐ヒノカ
まゆ流水スイ、まゆを清音シラとしめを伴音シラ
りゆせまゝ、のゝと樟林感傳カツリハコトハ、まゆを拂ハラフる
すすきまゝ、まゆこころ木と觀音クンモン、いくつてじゆつて
らうゆきまゝ、年下シテ一月イチゲツをすまし、じまも先サヘ
精セイ、おひきくまもりうき、じまのうき、わざ

まことにわざとふるほどの、まめのやうもんをさし
て、九月にこの、しまのゆきをさしてありま
す。まことに、たゞ麻呂ミツヘレシテ
ま御しみすのうにうつすてくま、ソシトハ、
人立すまじきそちー、ソシトニ育むてうりた
まじきやうに、しまのゆきをさして、
トもくふく、ソシテ之をまかへれど、たまひよ
十一年二月、まつたまのまじかへて、佛像、み
がきられ、おまきをさげて、まつたまのまじかへて、

かくしてかくすとぞかくすとぞかくすとぞかくすとぞ

生うるやうにあうにあうにあうにあうにあうにあうに
まをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまを

説勝身没中

わきとて勝身行ひとてまとてまとてまとてまとて

たる三とめりたのむりて二日とてまとてまとてまとて

主僧のふくふくにまがへどうと車

三ノ井源心中

ありだまなうとまとまとまとまとまとまとまと

よじおほきとまとまとまとまとまとまとまとまと

みとみれとまとまとまとまとまとまとまとまと

達磨院寺中

もれとこれと十五年ととととととととととととと

くじくじくじくじくじくじくじくじくじくじく

ううううううううううううううううううううう

いと、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、

大寺等身没中

月小、月小、一卷、一卷、一卷、一卷、一卷、一卷、

九月等身没中

古日七夜、いてきまます、日ごはり、いた御とくみま

一まの經としとすのと、くわづけ、わづけ、わづけ

持しきとて、とて、とて、

經とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、

李本庵繪事

まことにやうしの絵がお絵くせの
ありよろ中よりまことにし
ゆきよしと。大九年二月廿二日小太子をなす
ま御下三十九日うちみゆり先づてもあて
一天たりへらまゆり先づてもあて
かくはいふくさむほくとすの御下三十九日
中もつことわざく申しいくともり
おれもさでますと、されんじてまつれ
くわく申さるをすたとておぬさ
佛學

の名字をまねかれて、天皇ももあ
にひじりて、もとと三百年ご申と、百濟國小川え
て百年以上と、あらかとて、口あわせくらうの
うそなみの御下三十九日うちみゆり先づて
かくはいふくさむほくとすの御下三十九日
育事

育事

一世人代舒明天皇

十三年前年

美押坂内陵

ほどのみと舒明天皇ご申と、敏達天皇の御子に廣
人大元軍志皇子の御子と御母敏達天皇の御子と
育事

糠年姫とくみのうと、二月廿日くわくに

給御年三十

高麗文書

十三年

三

年

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

三十八

三十九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

七十

七十一

七十二

七十三

七十四

七十五

七十六

七十七

七十八

七十九

八十

八十一

八十二

八十三

八十四

八十五

八十六

八十七

八十八

八十九

九十

九十一

九十二

九十三

九十四

九十五

九十六

九十七

九十八

九十九

一百

一百一

一百二

一百三

一百四

一百五

一百六

一百七

一百八

一百九

一百十

一百十一

一百十二

一百十三

一百十四

一百十五

一百十六

一百十七

一百十八

一百十九

一百二十

一百二十一

一百二十二

一百二十三

一百二十四

一百二十五

一百二十六

一百二十七

一百二十八

一百二十九

一百三十

一百三十一

一百三十二

一百三十三

一百三十四

一百三十五

一百三十六

一百三十七

一百三十八

一百三十九

一百四十

一百四十一

一百四十二

一百四十三

一百四十四

一百四十五

一百四十六

一百四十七

一百四十八

一百四十九

一百五十

一百五十一

一百五十二

一百五十三

一百五十四

一百五十五

一百五十六

一百五十七

一百五十八

一百五十九

一百六十

一百六十一

一百六十二

一百六十三

一百六十四

一百六十五

一百六十六

一百六十七

一百六十八

一百六十九

一百七十

一百七十一

一百七十二

一百七十三

一百七十四

一百七十五

一百七十六

一百七十七

一百七十八

一百七十九

一百八十

一百八十一

一百八十二

一百八十三

一百八十四

一百八十五

一百八十六

一百八十七

一百八十八

一百八十九

一百九十

一百九十一

一百九十二

一百九十三

一百九十四

一百九十五

一百九十六

一百九十七

一百九十八

一百九十九

一百二十

一百二十一

一百二十二

一百二十三

一百二十四

一百二十五

一百二十六

一百二十七

けのやりかうと御のまくらうとを
れはまきていはすたつね一ノトシ
大きれらでいふれあややきてもんのひづ
まよのり称めつゝこれをお見りゆうとおれ
て、つまつまお大魔王と目し、にこひうるり
えききをあねてがんせきけよくらひまわ
じくまくらも小のりてのう仙、天人のみうり
もれいふしもとぞきお小きいわばふ
らうたかのもすいしきこれをみよし人
まくらも、まくらのをうむまき
て、まくらでたまのくらのくらままでうけれ
つわれくらじくらむつまこだくまきりほく
天智天皇
リ、三年こす年正月一、天智天皇の中大皇子す
三法興寺にて、うとをあそび、かくと御くわ
ちまつて、たて、うとをうし、せがましわれうとをそ
うとをまくわー、せがましわれうとをそ
うのまくわー、おもあらへそそ
まくわー、おもあらへそそ
りまくわー、おもあらへそそ

天智天皇
天智天皇

十一月小太臣擬妻うせ、シテノヒモリシテハシタの志

八度寺平章大内簡中

五十人乃にもれりカニテ、アリテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ

キモラノレセヤウカガルテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ

シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ

萬葉集金言釋出第中

頬生ハテニミ丈、釋迦、ワキの像をアリテ、シテ、シテ

シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ

シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ

シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ

シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ

シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ

シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ

シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ、シテ

校人彙

はくまでまよひ、まつまわはすかとつゝかみ
と申す、とわれり、よりこよあゆきえ
てはうれあゆきぬゑと申す御門に行きよ
りまよ、詰て、いあよおもひうへるまよは
らくの皇子が、うしろまよのものにあがふきさそ
めりこすとゆふまちいふみとをもてうへ、うれ
し事この御て、ゆいゆうかくいがまつとせうのうらま
やくもれをら、たゞよきまをへ、がほだまよ、うれ
しめがれりとほれいとせふかあらゆ、をだきとまよ
すらまのくよん人あらまなきよんか、とらふとまよ
きの連ともいぢき、とくとくとまよ
て、ゆうとひ、とくとくとまよ

但馬國人吉松松丸號

一
城八代芳
隱天皇
白雉五年十月崩
葬江國刀坂磧長陽

自雞五年十月十日崩

葬河曲刀拔磅長陵

ほのみこそ天皇と申す。皇極天皇の御代母

天賀天皇國譜不即位繪年

え」
す、とてくのうにアホで、まことにあつた
そこのよきやじかにいわく、なまく
みはりの行ゆくものを見て、まつり
やのまき、とてくわにじよをまつる
あきらめくふへー、すれど、みこや、
ひだはー、それも、まくら、アソブ、
いじり、とおもひ、いじり、とおもひ
ほくせん天音の、あらわし、
まくら、と、いじり、とおもひ、
野やまく、うねじまく、あらわし、
まくら、と、いじり、とおもひ、

内里事
小道登ニシテ一わのうち、たゞ一ノ先をもと
有え頼元はせむ者
がちに御付之興寺小智え頼えニ二人の侍より
またさきよりうろこころもくもし手す頼え
小ちういあんむくまんへもひてしのひとよすと
がちに下りてたますうじよしゆじ、
ふあるべくしてだらくのうじて頼えす陽子
有えかけにてうるのうじわすいか
かずまわるをこだまきあをりくものをすまも
もくくいもくじれづくればおもくみぬ、とお
けふじて二三月のう頼え、わざうじゆをね
へ前もくいのう中志がに頼えゆめと頼え、ね
きあらうへすてそれまくとあくうそく
智充かれ、いはくふじのうけれわづうまくわづ
うあがくふじのうけれわづうまくわづ
すあがくふじのうけれわづうまくわづ
うあがくふじのうけれわづうまくわづ

三月三日は行幸をしたるを
おもひてはまつたが、あつてあらまつた
しまれ、薄うすに頼えよつておもひた
経論を見てはいへば極樂としむれ、といふと
いふべからずとすばすてのふりに見せ
て、中の小みのまゝ、津の癌巣を觀しては
くわざめりとてよつて、これてからぢりあらは
され善根すくうくて津ちへきつてはだらまつ
すまふり、すえきてなむかふへりふりて、史て
して往生をさうへり頼えむよしとては
つれど、行幸をりへりて、がまの御とこまゝに社祭を
やむと神祇へりて、神祇を祭へりて、のみ
まゝまゝ、さやかなを祭へりて、の、汝
はがきの相好淨らの祓嚴を祝すて、行え
あはれの祓嚴をとれども、すれども、はは
れは祝うまゝ、さやかなを祝へる所であ
まゝまゝ、すれども、はらぬまゝ、津らりむけ
うりへりて、あまゆすれり祝すて、いわく
禊事へりて、すれども、はらぬまゝ、

小毛久り

一サ九代主明天皇 治七年

にまわくこと業めとては、れは皇廟を守る
重祚事

中一皇帝の又つづりまじくからむし印のうし
肩三日とくかうに付、絵はくすすす七年

二年、中一鎮足やまひよもとじとがを
鎮足法維摩經年金事

ねり、みつこだけまじなげせれ、小百済國も
まきれつるもまほめこと、一維摩經とえんで、
やういが、りくこアヒハシトナリたんじぬ
ま法明大法經とえんじとすまもく鎮足の榮美
かうこつておにまきてあくらう山へがて、代を

維摩經年金事

て、維摩禽坐了先君、りう七月小智通行達、
か、うちれ清をもあわせおつりうて、奉三藏、

清相事

清相言ひつてくももゆ、せおつりうみゆ、
義貴、少傳おつて、百濟國もまたれつし、也
あとの百濟寺、少傳おつて、百濟國もまたれつし、也
こ、信ひつて、おつりうみゆ、て、信をつらふ
東義のやく、もしてて、おつて、おつて、のみをやつて
され、尊尼經ひとくにけんもひもゆ、もとて、

筆の運氣あるときには、筆もひいて何ともいえない
筆不運事中
あくまでも筆走るまでうやうやしくて百遍も十回も
机にさしかかるまでじんぐりかねて、うつむいて、そで
小手をひいてじんぐりかねて、うつむいて、そで
うつむいて、ふきよる、一いちぢりうつむいて、そで
うつむいて、じんぐりかねて、うつむいて、そで
うつむいて、じんぐりかねて、うつむいて、そで
あれ、彼若乃は意識なりと云ふ事も、はづれしと

一
四
十
代
天
智
天
皇
治
十
年
崩
葬
山
城
山
科
七
陵

はまつりみと天智天皇こゆす。舒明天皇オニの御す。
御母赤明天皇を奉祀て室くらわいに、御日東え
くち抜き主はのう。正月三日くらわいに、御
坐年中十年うち七年とアキ十月十三日饌是更
候ふ。五つと五つあづけ時より、火で内桶内桶こぼれ、
蓋簞袋蓋簞袋本
てかわす。火は中長車中長車、河藤原こぼれまく拂事
大織冠大織冠、御ん車御ん車、いじくらわいに御花也いもすお

一
まし小ちりすあく五十人、せいかむと
ふれてたほへりくもけ、ともかくみゆの心
のうちすくはれかへるまうだ、大中長春氣佑
郷のよたとす十年正月五日御門ノ内主大
伴ミタモトトマヒテ御門ノ内主までまけに御門
ニナメシテ左近御門ノ東宮ノ子に付
さみ、みねに付く東宮ノ子に付
エムアシテ少和也九月ようヒレ、ひくす行され
一、ふ東宮がもんをそらすでわやまひやく
多き事り、ヨシカヒリテまでまつてまつてこの
をもとをし、^ノ東宮もとまわすあくに仰す方よ
ひたすらが、すまきのやくのひりとまつてま
りとまつてたほの政事小替改へおきち
われよとの行へ先と伊達うぶかんじよおきてま
とおとすとての山とよしよしよと十力光
大伴久麻下、東宮はすらおへ士月三日うと御門
とおとすおなはくおもとよしよとすと
おもとよとすおなはくおもとよしよとすと
おもとよとすおなはくおもとよしよとすと

一一十一代天武天皇

治五十一年
葬大和國檜隈行陵

ほほの久と天武天皇よりまへ許明天皇よりオニの御
子御母齊ぬて是と天智天皇の御世七年二月東言
小ちもにまふ美圓のう二月十二日よりかねより
よま世はしとぬあ十五年りもこのみこと
きをていくわがりよねどこしてもえもうちくゑ
してけまきまといしりりう・伏のれおと・天祐
ミタの御あの中よりもアハ天智天皇十二月
文宣天皇
三日ナサセホリ・ひむく・め白人伴玉手も
力けけけきもしてあくくうの育けりびのみ
り、宿すとんきそまうとど家一そり野一あ
いづこもせほアレ・と左右の食するもにけれ
けたしてうのゆわがい・とんまともつしお
マトケム太のじととまほり・とまほ・みだもく
少・天智天皇のミタコモリ・とまほ・みだもく
のもちやす・それりとゆけとゆきてまほへ
すにほせくらまもあ・とまほ・とまほのあ
のちやす・すあのが・とまほ・とまほのあ
をにまきもとまほ・めば・うもととけきア・人を
又・その京あらずの京までまほ・とまほ

より、さてまことにそりかとア人もあらず

大体もまづ御う、このみとの御じす先ひりてふえ
皇太極皇帝被奉旨奉天廟事

アミナアホルアホルトニシテ御さるうシテリキ

セアツキモリノモアシクシテのよつての

ア、おとはすまし手りくわい、おはすましんき

先にまわだりて、がまくわらばくふ

もてて、そふるをてもうタキニヤテ

室まわらひきこまてまうすもの

天皇令東國間事

セアツキモリトニシテ、のよくいとおしゆち

ニ、蘇大義太はこぞりまのめりまてまうて馬上

ウセキテうけつて、又えきにのわけ、うよのせ

まそくにつて脚こし、室ま二人のこしは余

人余も十人、うりきとてまつて馬上

うの日勅田こよひくにたまうにまきまと

ウリ人、大余人、とくにきてまう小守とねにと

きまう馬母を、もともとまうもとからうとく

ねをだして、まううとて脚またゆくねにとみ

うのをまくして、まううとみくふりつま

うのいき、あるまうとくいまうもう小守と

うのあくち日い音のまくにとくもまく

を拂へまてよりねまくのと五百人のとき
をいたしてうちかしまるたる大伴皇子三よんの
をもたりてくわいのとさむだりをゆくに
りくわうのすなへすがくと育と首あらはり
して大伴皇子をもりしれふせ百をしたせもり
お／＼大友皇子左右を食あひこゝりの
ひもとてち／＼よこみ／＼のじくとすえ
のと／＼のすけ／＼やのくとことわせ
／＼う／＼引た皇子のとせ／＼とすゑ
皇子も下ともつて、のくびのくれて山とそとま
お三日も皇子をつゝいゆ／＼う／＼く／＼は
お／＼日／＼のくいをもとからものもととてまき
左長秋説を乞配流事
おち日も下もれ左を食うれまきおやのく
りくをつゆにとくとすやてうの日も、とくらも
りくれりくとくとくぬこもがまも、拂しきと
皇子の御りててたゞ／＼とくとくとくとくと
たゞ／＼とくとくとくとくとくとくとくとくと
／＼とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

皇子すと下トモヨツテ、ゆきのれで山と
サニ日と皇子とアリゆきのり
セシ、日と皇子のくわをうかでくわのえに
豪長被謀たる亂事
女ち日と方下トアラシ左兵下トキナキアハ

かく
え
く
ま
す
わ
う
く
く
れ
た
れ

月よりみる野とのもとへりとをもいきとしよ

いくもとあらわすものあまはよそて

あれから、平ちり未粧元年三月申月からある

四月二月は備後國あらしまさ、一月までも

すまつて、未粧ニシテ草号を自鳳、首かアレド

三月にからてていて、一月で一切經事、

もと申月にまつて、也おれしり、三年三月三

にまつて百害大寺、

り、あまことじたまの御願ひ、体ほしにげれも

ひまつて三年の御、の

こじをまくらと

うよみの御、先よゆいの、の、ひまつて

あらて御、やまいか、こもせおあ、三年の御、

かわら、の、だい、あら先、とくも、一月十五年、

すまの、く、まほ、しゆままで、あれま

にて朱鳥之年三月申月まで、

皇子の子らが、たゞまでもうす
いあがめへ
ち

一四十一
西土一
持綏天皇
葬大内陵
大内陵
年

大清二年十二月十日崩
葬大内陵于武定陵此後大葬

はのひのみ、持統天皇ニ申。天智天皇少帝二仰し。又
天武天皇の子ミヒナガ也。母山田於右川麻呂女也。智慧也。
丁未の年生。元年丁未。四年。位。元年丁未。四年。位。元年丁未。
又。持統天皇。少帝。天智天皇。天武天皇。母山田於右川麻呂女也。智慧也。

碧梧上天之書
十年一變一位
在上天之書
十年一變一
位

一四十三代文武天皇
平一年崩年五
葬大和國檍前安昌里上陵

平
一
年
崩
年
五

天子の御文書を天皇に呈すに草稿

後行者流傳草中
十一年二年之中
五月十五日行者住圓通寺

三齋の事で其二の事
は行尊御事

侵行草行草

安達の鬼神にいたるふるいもりはもひそ
きつまうのくまでて、かたはり先づいた行者ん
もれうそもれも、まくらがくらはりしてわざと
せんしをあたおとせのえわくまわらえまくま
くらもくらてびびしらくさわやくまくま
行者いもと神電をいたてたれひとまやのゆ
もくらてまくらくはくくいへんとやむのちと
やのゆくとらくはくくいへんとやむのちと
みよのゆくとらくはくくいへんとやむのちと
ち後行者みよとあをまてまくまくまくま
しふ意ち生くとして行者とてまくまくまく
行者とてまくまくとてまくまくまくまくまく
いづくまくとてまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
行者まくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
大安寺に行車ゆけよみのゆくまくまくまく
よりくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

ちくを取る事無く仕合ひもして、みれを
乞ひあつてうへておれども、來のゆゑ
少人内備ひておろすれど、御内侍へてうへ
し、火をえまきまゝ、りそなむ、御内侍、
あらまゆまがけにほりまつまわる、御内侍、
手繪師、上りてましまと、いそ、おひらやもふ、
おもむに、たまはる、りんを佛へまく、おとての
うりうきまく、おとせれ、すまてまく、おと
おもすくれ、おもすく、三身具足一物、
おのとおも、在身の時、りうめき仰り、ゆき
化分相て、おもて、おもて、おもて、おもて、
切邊ひすれまく、おもて、おもて、おもて、
おもて、おもて、おもて、おもて、おもて、
おもて、おもて、おもて、おもて、おもて、
五人の僧生清して、徳奉一まで、おもて、おもて、
おもて、おもて、おもて、おもて、おもて、
三月小頭脳和尚、中之人のじれり、おもて、
おもて、おもて、おもて、おもて、おもて、
おもて、おもて、おもて、おもて、おもて、

直昭のふくらはしのじんじんのひより、すまのと

まもふくらはしやいもくのひりふくらはし

ゆまめその直昭縄床に端坐していろをもとす

うかねてひらそらすよその背をえどすに

小ちたはれりておおふるくよきうしなひてま

直昭高達青始大卒事

日本十一大葬、これ小をもつまか一五年、事無

不等日中住御言有事

小不比寺中納衣小をもあやまちの日人納言にうちれ

三十六の月、行者ももと後行者伴空國ありや

伴有月は正徳茶庵唐草座法唐事

まめもれわざく鉢よのきて唐へたりもくすり者

もももももも本所をわざれりて二年一度、う

けく山にゆれりて、まきあきをまよひまく

二月丁未日葬直昭

タカハシ二月丁未日釋奠、一トまことに

大資

大資元年、年子を申すこのうちも年子、あれ

りきてひまくもひまくも二年、うす七月

もももももももももももももももももももももも

三月壬午日葬直昭

おもももももももももももももももももももももも

ももももももももももももももももももももももも

ももももももももももももももももももももももも

中
小
大
人
也
極
難
之
事
也
此
事
也

一
無代元明天皇
泰光五年十一月
葬大和國添上赤椎山陵

卷之五
春
癸卯
葬大和國添上井
桂枝山陵

いさへとえひてゆき中は天行天皇の御子のひしすれ
御母神武天長山田石川麻呂ノレナメ嬪怪娘モのミ
カミ支吉天皇の御母トナリマス支吉天皇、また三十
年後、御母ノ御子、御子ノ御子、御子ノ御子、御子ノ御子
御子ノ御子、御子ノ御子、御子ノ御子、御子ノ御子、御子ノ御子
御子ノ御子、御子ノ御子、御子ノ御子、御子ノ御子、御子ノ御子
御子ノ御子、御子ノ御子、御子ノ御子、御子ノ御子、御子ノ御子
御子ノ御子、御子ノ御子、御子ノ御子、御子ノ御子、御子ノ御子

壬午年七月廿日
歲次己未年七月廿日
歲次己未年七月廿日

東漢書

又産トリオテアレニモ、奉國ノヤマヨリの事也
王乃作事ノヤマヨリ、はやかに作成されしも
あれ、之を以て、之を以て、之を以て、之を以て
きて、之を以て、之を以て、之を以て、之を以て
御王奈モサツシテ、アラミシキササギノササギ
のみ、幼少ノヤマヨリ、小奉國ノ人、之を以て
して、之を以て、之を以て、之を以て、之を以て

聞小不詣寺興道寺せや
まつりに京よすけ
てひきは門へ、まくのこり了れ、ひくとく
日暮日暮諸國事方昇而勢乃更未申
ひてこうじの口、
とくにさひ皆一見如春

同七年十月維摩會
同七年十月維摩會
同七年十月維摩會
同七年十月維摩會

四年十月維摩舍利也
平賀源輔守維摩舍利被移行軍
猪口九月
某也、れ
の事
四十二年小京守もか
九年九月
三百三十日御し才又れえ正天皇の水高内親王
をも小少り
をも

一
孝丘代
元山天皇
天年廿年四月十一日崩
享年九

（左）天皇を尊ぶ文書の室の御内

もとて政生をすててこのをもせばかくあれあ諸國
の政生しよはまつて五月三日みと太上
天皇もんじもに不比寺の門もとよりもとてのまよ
天平廿年三月相宣不比寺園園帝太上天皇典福寺中政立小御室中

小御室中政立すいき門、年二月三日みとが津東

宮ニゆづりすてよりたもとて太上天皇

一世六代聖武天皇

天平勝賀七年五月二日崩年五十七
葬佐保山陵

はまのみこと天皇天皇のやま文武天皇御子御母
不比寺のゆしちと皇后宮ニゆづる食老年二月
四日くそ升上御すとま御年廿五をもとおれ
莫名なう年子御龜ニワレ年三十

神龜二年日度相子禮始侍來車

アラカノガタモ村子のねすとま御年三歳
ももももておろくよいてまくらんしてわこ年と

半生七月小太上天皇れいとす行くゆくゆくゆく

同三年正月十日東金宣御年

アラカノガタモてまくらんに東人主堂をひきとくもと
行基善薩やまのうのりゆくゆくゆくゆくゆく

アラカノガタモてまくらんに東人主堂をひきとくもと
行基善薩やまのうのりゆくゆくゆくゆくゆく

天平三年三月供食長谷寺行基善薩也年四歲

二月女日もくせ供食もくせ行基善薩も尊

アラカノガタモてまくらんに東人主堂をひきとくもと
行基善薩も尊

アラカノガタモてまくらんに東人主堂をひきとくもと
行基善薩も尊

それの年ノ御幸先トモアラシテ御全幸
タニテ御年吉備の奉し人有リテ
わて日月十日トキナリトテ十日あり。ものぞく
ちくちくトキナリ。このあきうきを以先をも
日本國の人をもたてて、くまうたもとを教術をも
て日月をりくせふ。ひづれ。このくまうた
甲子年歲次平成五年秋八月廿二日吉士達
黄迷
す。十一月九日大嘗小戴。ひづれ。

ニ申シ。人嘗合の事。たゞ千人の人一百人のけ
そも。おもむく。すみ。かくよけます。そんこ
おもむく。すみ。あさみて。東人。こよな

よ。かのじき。一すちよ。人りも。ひく。てや。のえ
よ。のつ。申て。ま。か。も。し。見。よ。け。ます。十一月九

メ。ニ伊勢。神宮。行幸。一。ま。と。して。お。あ。け
い。り。と。申。を。ま。い。し。の。月。十一日。尼菴國。う。く。れ
こ。が。り。と。少。前。一。け。ま。と。ま。い。し。の。う。か。り。と。室

甲子年六月代宣日幸祭奉

中。の。祭。い。か。か。す。そ。ま。り。す。月。十二年六月。尼菴國。上
お。お。富。多。て。か。ま。年。十。月。十。日。御。神。信。樂。
享。そ。東。大。寺。大。佛。ヒ。リ。先。そ。と。す。前。壬。午。八
月。廿。三。日。に。東。大。寺。の。大。仏。ヒ。リ。先。そ。と。す。前。壬。午。八

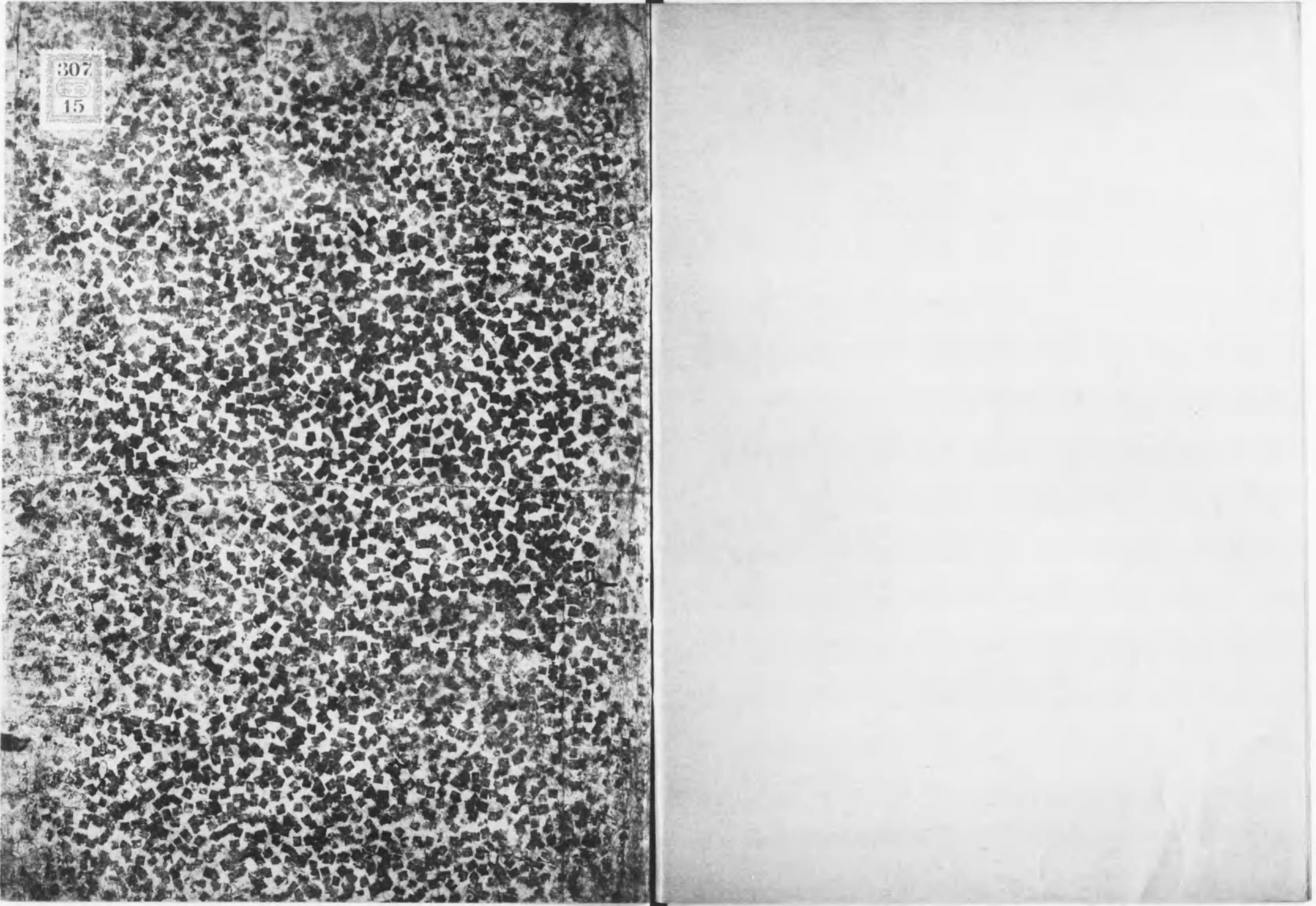
十九年九月廿九日大佛寺、いきてえりて御内事
隆興寺より九百文りをみて、門れまき首奉題
かみにてくわゆこれもとくらまわすこゑ之上
是も前月廿日小年号り天平感應元年。さかへ
きされこそこの年号、やうて又うもうくつ年號
ゆくは、いつともえさむち古月二日くは
沙くは、かくして左ど天皇主を申 そくし御年
辛巳の年をなまひしる

一
甲士代
若謙、天宜

（中略）各課天空の御しおり

御母不在寺のゆきしすせんえぬり皇后に在す天平威實
之年七月二日位リ、御年廿一歳リ、中十
年也御行リ、東宮リ、御龜玉リ
御年二歲リ、坐リ、御名リと位リ、天平國寶元年十月廿四日、東大寺の大佛リ、
坐リ、三年の引度リ、すもて
十二月にやまとリの焉リ、十二月
之リ、やうわリて、もとをもとリ、百丁衣
東大寺住持、御筆、文聖武天皇、上天皇

どてなまくははるゝをまほやうのこ
やもぢりゆふうそちくゆ一中こむかうとみれ
人へらぬあて天平勝寶四年三月廿日重
寺の大佛小佛坐像を以ててまくは四
月九日力情を請して供養一そぞうおき全年う
し道鏡うらまくりて如意輪法師あるひー御
やうくみの仰たまくとせりまくはゆき乃
は望こすしめうんちり實字二年と位を束
宮よりちまくとうがて今上天皇



終

